大分大学派遣留学生支援制度（短期研修型）実施報告
(微生物学講座)

本学医学部微生物学講座は、AMED/JICA による SATREPS（地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム）に採択され（平成 29 年～令和 4 年度）、長年提携しているフィリピン・サンラザロ病院とともにフィリピンにおける狂犬病制御に向けた課題について国際共同研究、ODA 事業として取り組んでいます。

今回、本学医学科 4 年に課せられている科目である「研究室配属」において、4 年次生青木陽祐さんを狂犬病流行国である、フィリピンのサンラザロ病院に約 1 か月間派遣し、良き臨床医・医学研究者になるため、この研究室配属を通して、医学・医療をサイエンスの側面から見ることのできる能力や国際的な視点から医学・医療を見ることで広い観点から物事を見る目を養うことを期待しました。

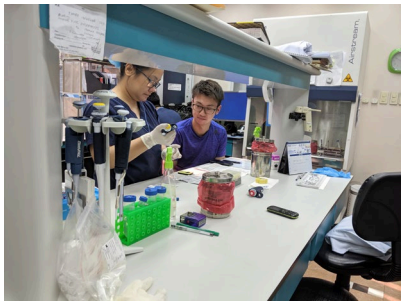
特に狂犬病流行国で狂犬病制御に関わる研究に取り組むことで、上記目的を果たすべく現地スタッフの指導のもと研究を行いました。

医学科４年次生　青木陽祐さんの感想

今回の研究室配属はフィリピンでさせていただき、海外での長期滞在は自分が思っていたよりも不便で辛いことが多かったですが、自分の成長を感じられ、充実した時間を過ごすことができました。研究では、自分が興味を持っていた狂犬病の研究を行うことができ良かったです。初めて研究をしてみて、研究の大変さと辛さがほんの少しだけですが分かった気がします。

正直臨床にばかり興味を持っていた自分ですが、フィリピンでお世話になった齊藤先生がおっしゃっていた「研究は世界を変える」という言葉がかなり自分の心に残っています。仮に 1 人の診療時間を 10 分として、1 日 10 時間、1 年 300 日、一生 50 年働くとしてみると、約 90 万人の患者を診ることができます。多いように思えるけれど 90 万人という数字は日本の人口の 1 %未満で、世界人口で考えればかなり少ないと思えます。しかし、研究によってまだ治療法のない病気を治すことができるような方法を確立できれば、自分が見たことのない世界中の多くの苦しんでいる人々を助けることができ、さらに今後も救い続けることができると考えたとき、研究者としての視点の重要性を再認識できました。

最後に、今回このような機会を設けてくださりご指導してくださった西園先生、フィリピンでご指導してくださり面倒を見てくださった齊藤先生、渡比前帰国後にご指導してくださった山田先生、研究のサポートをしてくださったリンゼイさんとサンラザロ病院長崎ラボの皆さん、その他今回のフィリピンの研究室配属でお世話になった方々、皆さんに心から感謝申し上げます。この研究室配属で得た経験、知識、繋がりは今後必ず人生の助けになると信じて、これからも頑張っていきます。



SLH でリンゼイ（SATREPS プロジェクトの大分大学ラボで雇用している）さんに指導をして頂いている様子ラボでの実験の様子（唾液をイムノクロマト検査に供している）

ラボでの実験の様子（唾液をイムノクロマト検査に供している）

SLH 病院での病棟見学（入院患者のカルテ回診）

SLH 今回お世話になったサンラザロ病院内長崎大学ラボの皆さん